

青年期における問題行動傾向と自己評価的意識

長谷川 博一

問 題

ひとり人間（＝個）を理解しようとするとき、心理学は伝統的にしばしば平均的でない人間に視点を向けてきた。平均的でない特異なタイプの人間、あるいはそのような状態にある人間に対する理解を深める（idiographic）ことで、人間全体に共通するところ（＝普遍）がみえてくる（nomothetic）のである。そのような意図をもって、本来通常と異なる心理という意味で用いられる異常心理の概念には、正常でない心理という否定的色彩の濃いものとなってきた。臨床心理学においては、その臨床（clinical）という名称に示唆されるように、主に心理的に不適応の状態にいる一個人の生き方を記述する。芸術家や作家など天才の生きた跡を分析する病跡学（pathography）にしても、やはりその天才の病理性が問題とされるのである。

上述のとおり、伝統的に心理学は人間の健康的状態についての志向性に乏しいのである。このような傾向への警鐘をひとつの意図として、日本において人間性心理学（Humanistic psychology）会が設立されたのは1982年であっ

た。その中では、人間についての研究は、研究者である心理学研究者の興味と必要とからでなく、研究される研究対象である人間の側からの要求に答える方向への研究でなければならない（戸川、1983）、とされる。

Rogers, R.C. は、人間が適応の状態にあるかどうかを体験（experience）と自己概念（self-concept）の関係で論じ、健康な人間はこれらが一致している状態にあるとした（fig. 1）。そして一致の状態をカウンセリングの目標にする。自己概念とは、人が自分自身に対していだけ意識、それを暗黙のうちに支えている基盤的な概念構造である（梶田、1988）。自己概念を構成する要素のひとつに自己評価的意識がある。これは、何らかの意味で自分自身の価値付けに関係するもの（梶田、1988）であり、行動の準拠枠として機能し、自己受容性や自信、優越感と密接に関係している。Rogers の適応の考え方に従えば、個人が実際に体験しているところの適度な自己評価（自己受容）の水準が心理的健康の指標になるといえる。

自己評価的意識に関しては、我が国においても比較的最近になっていくつかの実証的研究の報告がみられるようになった。これらに共通していえることは、自己評価の低い場合を問題視するという前提で書かれている点である。

自己評価的意識の発達について、加藤（1977）は、高校生期においてそれは低下し、自己批判傾向が高まるとしている。青年期は、これまでの親との依存的関係から脱却し、自立し、社会の中で対等な一員として自らを発揮していくようにならねばならない。内的には、自我の問題に取り組みはじめ、またそれは外界へと拡張していく。このような段階においては、自己評価の意識は不安定となり、外界とのかかわりかた

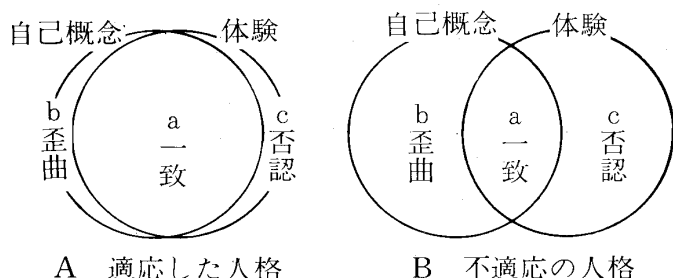


Fig. 1. Rogers, R.C. の適応理論 自己概念と体験が一致する a の領域の大きい A の状態の人は適応的である。B の状態の人は b の歪曲と c の否認の領域が大きく適応的でない。

によっては容易に低下してしまうのだろう。また、この時期の自己評価の低下は、第二次性徴の急激な身体生理的変化による、身体性受容の低下と深くかかわっていると思われる。青年期の心理療法においては、自己評価を高める（菅, 1984）ことが暗黙の目標とされる事実に通じている。宮沢（1988）は欧米における自己受容性の発達についての縦断的研究を紹介し、その中で自己受容性は年齢とともに増加するとした。宮沢自身の実施した中学生女子に対する縦断的調査では、自己受容性は変化せず、むしろある側面においては低下すると述べた。その説明として、青年期前期を否定期、後期を肯定期とした Buhler, Ch. の説を採用している。岡田・永井（1990）の横断的調査では、自己評価は男子が高校生において低く、女子は大学生で高い結果となっている。

青年期における自己評価的意識の発達についてこれらを総合すると、次のようなことがいえよう。青年期全体を概観すれば自己評価は緩やかに上昇するが、前期（中学生、高校生期）においては一時的な低下もみられる。また、そこには男女差がみられ、女子において身体性の受容の問題が男子のそれよりも深刻であることが示唆される。

宮沢（1982）は自己受容性と Y G 性格検査との関係を調査し、自己受容性の高い者は情緒的に安定していることを示した。また岡田・永井（1990）は対人恐怖的心性との関連を調べ、中学生と大学生において自己評価と対人恐怖的心性の間に負の相関がみいだされたと報告している。このことについて木村（1983）は、現実自己と理想自己のギャップをうめられないまま、低い自己評価のもとで対人恐怖的心性が生じやすいと考察している。青木・松井・岩男（1986）は乳児をもつ母親を対象に母性意識との関連を調査し、その結果、子育てに対し否定的意識が強く肯定的意識の弱い母親は、自己評価も低く外向性も低くなっていることを示した。

青年期の自己評価と親の養育態度の関係については、従来、両親の子どもへの関心や受容が子どもののちの自己評価の発達に影響を与える

とされてきた。また、徳田（1987）の研究によると、同性の親によって心理的に自立すべき存在として扱われることが自己評価を高める要因となる。養育態度だけでなく、両親自身の自己評価もまた子どもの自己評価に関係しているという指摘（石川, 1981）もある。

青年期前期において、自己評価に一時的低下がみとめられることはすでに述べた。この青年期危機に関して、長尾（1989）は次のように説明している。「…特に自我の弱いものは、現象として、…不登校や反社会的行動などの問題行動や抑うつ、心気、強迫、恐怖などの神経症的反応、あるいは摂食障害や身体的痛みなどの精神・身体的反応などを伴う不適応状態を呈することもある…」はたしてこれらの行動や反応すべてが、自我の脆弱さを伴った危機反応として一括できるだろうか。さらに、青年自身の心理的健康の視点で論評すれば、いわゆる問題行動は本当に問題なのかという疑問が生じる。長谷川（1989, 1990）は、これまでの青年期問題行動についての捉えかたが現象面にとらわれすぎていると指摘し、その後の発達の方向性という中長期的展望に立ってみる必要を述べた。そして行動リスト 90 項目の因子分析の結果、青年期（高校生期）の問題行動を「奔放」、「対抗」、「強迫（男）、身体（女）」、「意識」、「無為」の 5 つの因子（Table 1）に分類し、むしろ奔放という自我拡張型の軽度の問題行動は、心理的健康の面からは肯定されるべきではないかとした。これは、臨床的経験から、たとえば予後の良好さという点からも指摘されうることである。

Table 1 問題行動傾向 5 因子(女子)とその内容
(長谷川, 1989)

因子名	因子の内容
①奔放	社会的制限を逸脱した自由勝手な態度、行動
②対抗	他者への対抗の結果として生じる態度、行動
③身体	身体への過度な関心から生じる態度、行動と身体的愁訴
④意識	特定の観念に囚われている意識上の煩悶状態
⑤無為	行動—精神両面における活動水準全般の低下状態

本研究は、自己評価的意識と問題行動5因子との関連を調べるものである。従来の知見にならって自己評価の高さを肯定的に解釈し、それが心理的健康の指標となりうるを考え、青年期に問題とされる行動傾向に潜在する心理的健康度を吟味することを目的とする。結果によっては、青年の問題に対するこれまでの枠組みを修正することが必要となるかもしれない。

仮説は次のとおりである。従来、高校生の行動として問題視されてきたものが必ずしも心理的な不健康の表現型となっているのではないだろう。具体的には、自己評価という観点からすれば、自我拡張的な問題行動因子の「奔放」は、自我収縮的な、「意識」、「無為」に比較して肯定されるのではないか。

方法

1 被調査者

被調査者は大学生女子163名（1年生76名、2年生87名）である。実施は1990年6月、講義時間内に、1年、2年別に集団法で行った。

2 問題行動傾向調査

問題行動傾向を調査するために、長谷川（1988）の女子用スケールを修正して用いた。これは90項目のアンケート形式で、問題行動の傾向が5つの因子別得点として算出されるものである。今回は各因子に対する項目として5つずつ因子負荷の高い順に選出し、計25項目のスケールとした。項目は、No. 1, 6, 11, 16, 21が「奔放」因子、No. 2, 7, 12, 17, 22が「対抗」因子、No. 3, 8, 13, 18, 23が「身体」因子、No. 4, 9, 14, 19, 24が「意識」因子、No. 5, 10, 15, 20, 25が「無為」因子となるよう配列した。項目の内容は付表に示す。

このスケールは本来、大学生を対象として、高校生時代の問題行動傾向を retrospective に調べるために開発されたものである。そうすることで、被調査者の回答に際しての防衛的態度がかなり軽減されるという利点があると思われる。そこで今回も、「高校生時代3年間のあなたに当

てはまるかどうかで答えてください」という指示で回答を求めた。なお、回答は、「あてはまる」、「どちらかといえばあてはまる」、「どちらともいえない」、「どちらかといえばあてはまらない」、「あてはまらない」の5段階評定である。

3 自己評価的意識調査

自己評価的意識は梶田（1988）の自己評価的意識調査項目を用いた。これは、30項目から構成されており、5つの下位因子（女子用）に分けられている。因子は、①自信、②優越感、③自己受容、④自己防衛性、⑤自己への素直さである。このうち自己防衛性だけは、自己評価の低い方向で関連している。具体的な質問項目を付表2に示した。回答は、「はい」、「どちらでもない」、「いいえ」の3段階評定である。問題行動傾向調査に引き続いて実施した。

さらに自己評価意識調査に続いて、従来の性格検査との比較を行うためにMPI（モーズレイ性格検査）を実施した。この検査は、E（外向性）尺度とN（神経症傾向）尺度の独立な2軸により判定されるものである。

4 分析の方法

まず、問題行動傾向調査の回答にもとづいて、因子別に高傾向群（H群）と低傾向群（L群）に群分けを行う。そして、各問題行動傾向因子別に両群の間で自己評価とMPIの結果に差がみられるかどうかの検討をする。自己評価については、総合自己評価と5つの自己評価因子の計6つについて分析を行う。

結果

1 全体的な結果と群分け

Table 2 問題行動傾向得点の平均（N=163）

因子	奔放	対抗	身体	意識	無為
得点	13.0	7.4	8.9	11.7	13.0
(S D)	(5.19)	(2.78)	(3.69)	(4.48)	(3.67)

Table 3 自己評価意識の平均点(N=163)

下位尺度	総合	自信	優越感	受容	防衛性	素直さ
得点 (S D)	51.8 (8.56)	16.8 (3.36)	4.6 (1.53)	10.3 (2.86)	21.0 (3.19)	13.6 (1.97)

Table 4 MPI得点の平均(N=163)

尺度		
得点 (S D)	30.1 (9.48)	26.2 (9.85)
尺度	E	N
得点 (S D)	30.1 (9.48)	26.2 (9.85)

Table 5 問題行動傾向の因子別H群とL群

因子	H 群		L 群	
	得点範囲	人数	得点範囲	人数
奔放	16~	44	~10	61
対抗	9~	39	~ 5	56
身体	11~	48	~ 7	70
意識	14~	53	~ 9	57
無為	15~	47	~11	60

被調査者163名の問題行動傾向得点と自己評価的意識得点、MPI得点の全体的な結果をTable 2~4に示す。今回得られたMPI得点(Table 4)をマニュアルに記載された女子大学生(N=433)平均値(E=26.3, N=24.4)と比較してみると、E尺度において高くなっている(p<.001)ことがわかる。これは、マニュアルに用いられたサンプルが1963年当時のものであることが影響しているであろう。30年近くの間で、女子大学生全般にかなり性格の外向化がすすんだことをうかがわせる。

次に、問題行動傾向の各因子の得点において、平均から標準偏差の1/2以上高い得点の者をH群、1/2以上低い得点の者をL群とした。結果的に、「奔放」H群44名-L群61名、「対抗」-

H群39名-L群56名、「身体」H群48名-L群70名、「意識」H群53名-L群57名、「無為」H群47名-L群60名となった(Table 5)。

2 因子別問題行動傾向H群とL群での自己評価の差

問題行動傾向の高い(H)群と低い(L)群での自己評価の差異を検討する。問題行動因子別のH群とL群での自己評価得点をFig. 2~6に示した。

「奔放」傾向(Fig. 2)の両群の間には、自己評価的意識のいずれの側面においても統計的に有意な差はみられない。「対抗」傾向(Fig. 3)では、自己受容においてのみL群の方が高い傾向にあるものの、全体的には差はないといってよい。次に「身体」の傾向(Fig. 4)であるが、優越感においてのみL群の方が高くなっている。「意識」傾向(Fig. 5)においては両群の間には、自己評価的意識のすべての下位尺度で有意差がみられる。総合、自信、優越感、自己受容、自己への素直さではL群が高く、自己防衛性で、H群が高くなっている。つまり、各尺度の自己評価の高さを示す方向に、「意識」L群の方が高得点を示すのである。「意識」の問題傾向が高い青年の自己評価はすべての下位尺度において低い。最後に、「無為」(Fig. 6)についてであるが、これも「意識」と類似した結果となった。自己評価的意識の総合、自信、優越感、自己受容の、いずれも自己評価の高さを示す4つの尺度で、L群が高い得点となった。「無為」の問題傾向が高い青年の自己評価は低いのである。

以上、問題行動傾向の高低と自己評価との関係を再度整理すると、「意識」、「無為」の傾向が強い青年の自己評価は低いといえるが、「奔放」、「対抗」、「身体」の傾向と自己評価にはほ

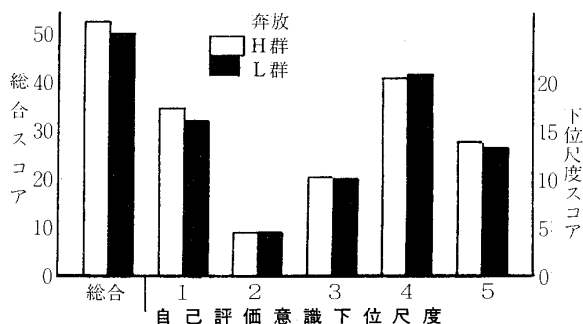


Fig. 2. 「奔放」H群、L群の自己評価

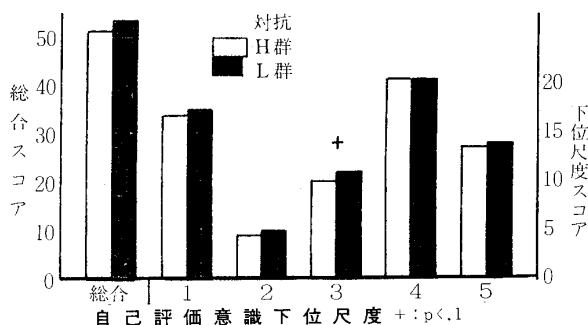


Fig. 3. 「対抗」H群、L群の自己評価

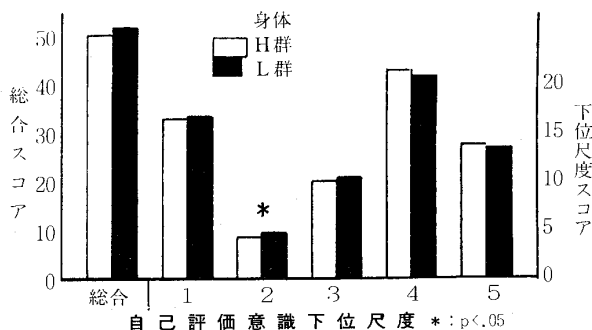


Fig. 4. 「身体」H群、L群

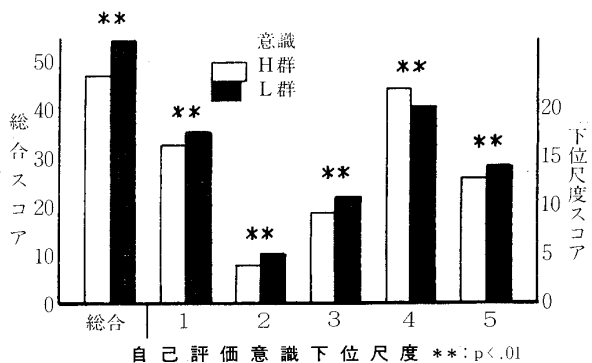


Fig. 5. 「意識」H群、L群の自己評価

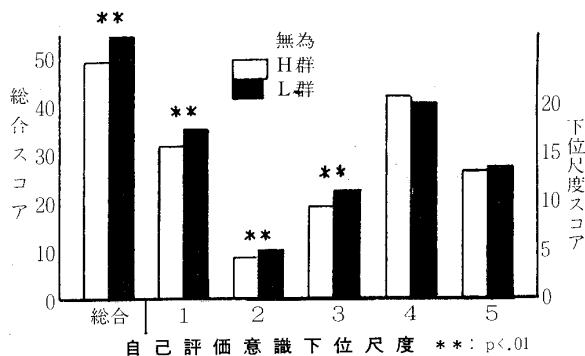


Fig. 6. 「無為」H群、L群の自己評価

とんど関連がないということが出来る。また、統計的に有為な程度ではないが、「奔放」傾向 (Fig. 2) において、H群とL群の得点の大小関係が他の因子の場合の関係と逆転している点に注目したい。むしろ「奔放」の問題傾向の高い青年の自己評価は、他の問題傾向に相対して高いといえるのではないか。

3 問題行動傾向とMPIとの関係

問題行動傾向の5因子とMPIのE(外向性)尺度との関係を Fig. 7に、N(神経症傾向)尺度との関係を Fig. 8に示した。E尺度をみると、「奔放」H群、「意識」L群、「無為」L群で高く、これらの群では相対的に外向性が強いことがわかる。N尺度では、「身体」L群、「意識」L群で高く、これらの群で神経症傾向が強いことがわかる。以上の結果に基づいて問題行動傾向5因子とE、N尺度との関係を明確に示したのが Fig. 9である。E、N尺度の直交軸、9カテゴリーの中に、5因子H群をプロットした。神経症傾向の高い問題行動はなかった。「無為」、「対抗」、「奔放」の問題は神経症傾向が中位であり、向性はこの順に内向、両向、外向となった。「意識」と「身体」の問題行動はいずれも神経症傾向が小さく、向性はそれぞれ内向、外向となった。N、E両軸において平均的であったのは「対抗」傾向である。この問題傾向は他者への敵対や攻撃、反抗といった深刻な事態を含むものであり、N、E軸において平均的ということが、「対抗」の問題行動傾向が平均的であるということを意味していない。問題行動を理解する際に、この2軸ではとらえることができない別の次元を想定せねばならない。

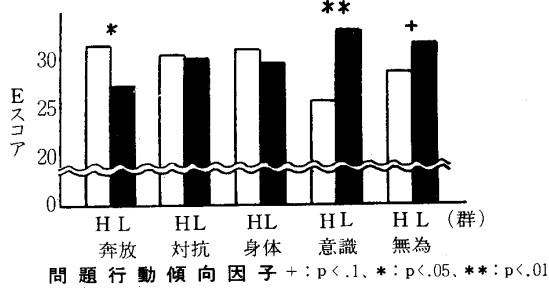


Fig. 7. 問題行動と E (外向性) 得点の関係

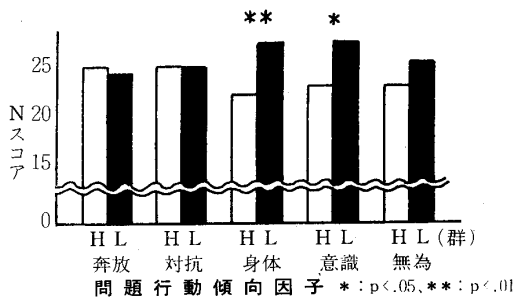


Fig. 8. 問題行動と N (外向性) 得点の関係

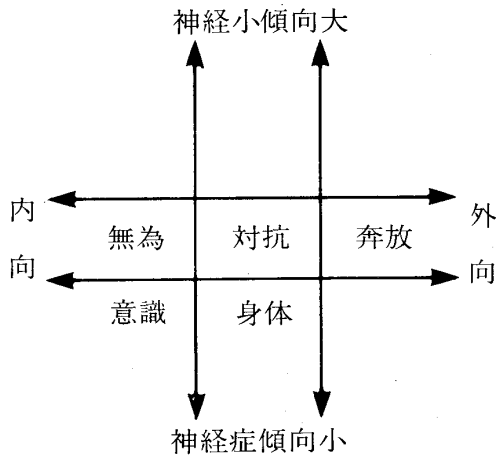


Fig. 9. 問題行動傾向 5 因子と外向性、神経症傾向との関係

4 自己評価意識とMPIとの関係

Table 6 に自己評価的意識の 6 尺度の得点と MPI の E、N 尺度の得点との相関係数を示した。E (外向性) 尺度は、自己評価的意識のいずれの下位尺度とも中程度に強い有意な相関 (ただし自己防衛性は負の相関) がある。特に、自信とは比較的強く関連しているようである。自信をはじめとした自己評価の高い状態では、その自信に裏付けられて積極的な行動を可能にするから、外向性は自己評価のレベルの従属変数となると考えるのが妥当であろう。一方、N (神経症傾向) 尺度と自己評価の程度とはほとんど関連しない。神経症が自己評価の低下を伴っていないとすれば、それは神経症の治療目標を設定する点からも注目されるべきであろう。

考 察

1 問題行動と心理的健康

従来の研究にしたがって、自己評価の高さが適応の指標となると仮定しておこう。今回の調査結果によると、自己評価と関連の強い問題行動傾向は「意識」と「無為」であり、それは負の相関にある。つまり、意識上の煩悶状態である「意識」や活動水準全般の低下である「無為」の傾向が高まると、自己評価は著しく低下するのである。また、顕著な結果は得られなかったが、社会的制限の逸脱である「奔放」の傾向はむしろ自己評価の高い状態の方に関連がありそうである。これらの結果は仮説を支持している。

長谷川 (1988) はかつて問題行動を外向 (自我拡張) 型と内向 (自我収縮) 型に分類したが、この表現を用いれば、内向型の問題傾向を呈する青年の自己評価は低いということができよう。そしてそのことは、そういった青年が心理的に

Table 6 自己評価意識とMPIとの相関

	総合	自信	自己評価的意識			
			優越感	受容	防衛性	素直さ
外向性	.52	.47	.30	.35	-.23	.39
神経症傾向	.13	.16	.13	.07	-.12	.08

病んでいるという表現に置き換えられる。逆に、外向型の問題傾向は、自己評価という測定道具を使用する限り心理的健康上問題とはされないのである。このことはいくつかの臨床事例における、予後の良好さという報告の中に見いだすことが可能である。青年を取りまく親や教師など大人の視点で、指導の容易さという点から外向型の問題ほどに内向型の問題が重大視されない現実は、改められなければならないであろう。

2 自己評価的意識（自己概念）の変容に関して

自己評価の高さと心理的健康度の関連を吟味する際、自己評価の変容の問題にも注目する必要がある。自己評価的意識を含む自己概念に変容が生じれば、すなわち心理的健康度も変化していると考えられるからである。下斗米（1988）は、Festinger, L. の認知的不協和理論をもとに次のような論を展開した。与えられる情報の信頼性と自己概念の確信度にもよるが、既存の自己概念を強化する可能性の高い整合フィードバック事態の受け手は確信度を増加させ、不整合な情報を提供された受け手は自己概念の変容を迫られる事態に置かれる。彼は自己概念として向性を用いて、向性に関する情報をフィードバックしたが、それを自己評価に影響を与える何らかの性格特性のフィードバックに置き換えればよい。情報源の信頼性が十分に高い状況で、たとえば、自己受容の低い被験者群に性格検査の結果得られたとしてネガティブな性格をフィードバックすれば、彼らの自己受容はますます低下するであろう。これはネガティブな整合フィードバックである。同じく彼らにポジティブな情報をフィードバックすればどうであろうか。

実験状況でなく現実場面での、問題行動傾向のある青年に対する、大人からの無意識的なフィードバックという事態についても考慮する必要がある。自己評価の低い「意識」や「無為」傾向の青年に対しては、さらに自己評価を低下させるレッテル貼りがなされているのではないだろうか。また逆に、目的（治療）的に自己評

価的意識を操作することが、行動の改善に通ずることになる。

3 心理的健康とは

最後に、自己評価の高いことが心理的に健康なのか、という基本的な前提について若干考える。Table 7に、Rogersらの「精神的に健康な人」に関する定義を示した。彼らの表現はやや抽象的で、自己評価との関連性など具体的に把握し難い感が否めない。現状では、残念ながら心理的健康についての実際的な定義付けはなされていない。操作的にどう表示するかという観点から、自我同一性の確立や自己受容性の範疇で論じられている。また、心理的健康を適応という表現で置き換えるにしても、適応が何に対するものなのかを考えていくと、適応すべき社会自体が流動的であるから曖昧となる。また、過剰適応、仮性適応という考慮すべき問題も生じてくる。

名古屋大学が精神的健康（Mental Health）を測定する目的でNMHI（名大式精神健康度調査）を開発した（池田，1990）。これは下位尺度として①身体的兆候因子、②自我と自己概念因子、③家族関係因子、④神経症因子、⑤抑鬱—自殺傾向因子、⑥精神分裂病的因子の6つから構成される。下位尺度名からもわかるように、この調査は精神医学あるいは臨床心理学的に問題とされる異常体験の経験の程度を測定するものが中心となっており、本論文の問題とする心理的健康とは質を異にしている。

自己評価の高さと健康度の関連の問題について、Table 7に注目し、「完全に機能する」、「自己実現する」、「生産的」という人間の状態を、筆者なりに「その人間の固有の可能性を発

Table 7 精神的に健康な人の定義（丹野、1988）

Rogers, C.	完全に機能する人間
Allport, G. W.	成熟した人格
Maslow, A. H.	自己実現する人格
Frankl, V. E.	自己超越した人間
Fromm, E.	生産的人間

揮しつある水準である」と解釈しよう。その水準が自己評価の高いことを必要条件とする点は十分理解されよう。ところで、自己評価の過剰な水準はどうであろうか。ある種の精神医学的に病的な状態、たとえば躁状態、多幸状態、妄想（血統妄想）などでは自己評価的意識の高揚がみられるだろう。これらの病態と自己評価との関連を明らかにするための実証的研究が課題となる。この問題に関して、再度 Rogers の説を引用し、個人が体験している以上の自己概念の形成を「歪曲」(Fig. 1)として不適応状態と考えるのである。彼の考えに従えば、体験している以上に自己評価を高める状態（歪曲）、体験しているところより自己評価が低下した状態（否認）のどちらも、不適応な人格であるとされる。本調査において「奔放」の問題傾向に自己評価の高さをうかがわせた点については、自由奔放な行動化をとる青年の、ある種の万能感が反映されているのかもしれない。

文 献

青木まり・松井豊・岩男寿美子 1986 母性意識から見た母親の特徴—ライフ・ステージ、自己評価、充実感との関係から—心理学研究, 57, 207-213.

長谷川博一 1988 思春期青年の問題行動—外向型と内向型の比較調査—名古屋大学教育学部心理教育相談室紀要, 3, 137-143.

長谷川博一 1989 青年の問題行動の構造—女子学生についての調査結果—名古屋大学教育学部心理教育相談室紀要, 4, 127-133.

長谷川博一 1990 青年期男女にみられる問題行動傾向の構造 東海女子大学紀要, 9, 75-85.

池田博和 1990 キャンパスの精神的健康増進に関する研究 キャンパスの精神的健康増進に関する研究報告書 名古屋大学教育学部

梶田叡一 1988 自己意識の心理学 第2版 東京大学出版会

加藤隆勝 1977 青年期における自己意識の構造 心理学モノグラフ No. 14 日本心理学会

木村法子 1983 青年期における対人恐怖的心性について—自己像との関連から—心理臨床学研究, 1, 7-17.

宮沢秀次 1982 女子青年の自己受容性と性格特性

日本心理学会第46回大会発表論文集, 297.

宮沢秀次 1988 女子中学生の自己受容性に関する縦断的研究 教育心理学研究, 36, 258-263.

長尾 博 1989 青年期の自我発達上の危機状態尺度の作成の試み 教育心理学研究, 37, 71-77.

岡田 努・永井 徹 1990 青年期の自己評価と対人恐怖的心性との関連 心理学研究, 60, 386-389.

Rogers. R. C. 1951 A Theory of Personality and Behavior. (伊藤編訳 ロジャース全集8 パーソナリティ理論 岩崎学術出版社)

下斗米 淳 1988 社会的フィードバックが受け手の自己概念変容に及ぼす効果—送り手についての受け手の認知が果たす役割—心理学研究, 59, 164-171.

菅佐和子 1984 心理療法場面から見た女子青年の Self - Esteem の問題について 心理臨床学研究, 2, 25-37.

丹野義彦 1988 性格と異常心理：心のやまいとパーソナリティ (斎藤勇編) 図説心理学入門 所収 誠信書房

戸川行男 1983 心理学における人間中心の方法 人間性心理学研究, 1, 2-7.

徳田完二 1987 青年期における自己評価と両親の養育態度 心理学研究, 58, 8-13.